

O3-012

大学生におけるHIV感染想定時の自己イメージ 尺度作成の試み

飯田敏晴^{1),2),3)}・いとうたけひこ⁴⁾・井上孝代⁵⁾

- 1) 国立国際医療研究センター病院 エイズ治療・研究開発センター(ACC)
- 2) 財団法人エイズ予防財団 リサーチ・レジデント
- 3) 明治学院大学大学院心理学研究科 博士後期課程
- 4) 和光大学 人間関係学部
- 5) 明治学院大学 心理学部

2010年11月24日(水) 10:32~11:44

目的

発表者らは、HIV/AIDSの予防的視座(Caplan, 1967)、すなわち、感染予防(1次予防)、早期発見(2次予防)、療養継続・2次感染予防(3次予防)のうち、**感染予防、早期発見**に資することを目的として一連の基礎研究を行っている。

今回、コミュニティ規模での**予防的介入プログラムの計画・実施・評価**の際に**資するツール(尺度)**を開発したので、その成果の一部を報告する。

尺度名：HIV感染想定時の自己イメージ尺度
HIV Self Image Scale: HIVSIS
(ハイブシス)

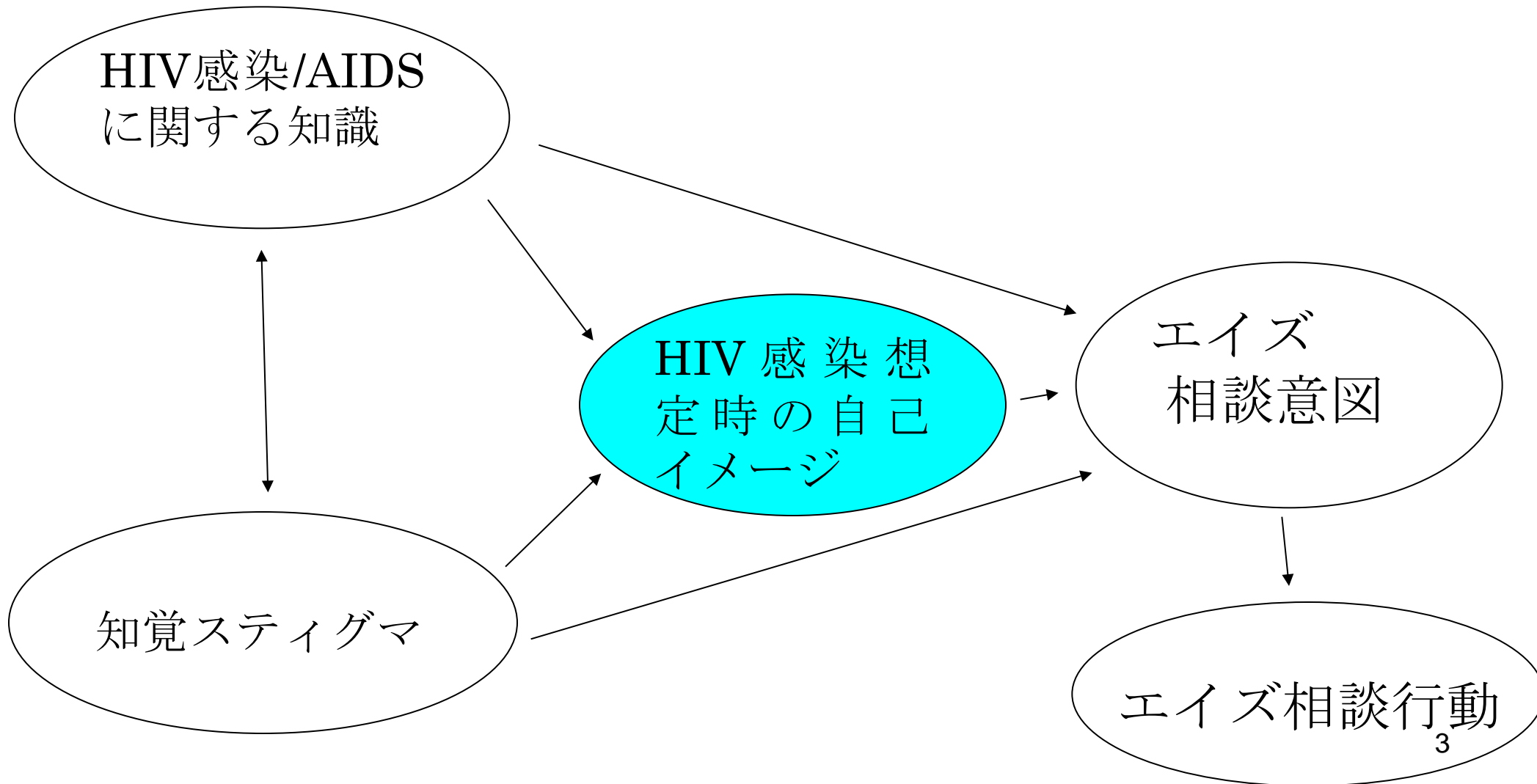
注1) 本研究は、平成20年度日本コミュニティ心理学会若手学会員研究・実践活動奨励金の補助を受けて行った。

注2) 本研究は、第一発表者が2009年度当時の所属である明治学院大学大学院で行った調査の一部である。²

注3) 研究計画における倫理的側面は、明治学院大学大学院心理学専攻委員会の承認を受けて行った。

研究構想の全体モデル

Information, Motivation and Behavioral Skills model (Fisher & Fisher, 1992) を援用



先行研究(1)

○木村(1996) : 大学生398名(男212名 女186名) 質問紙調査

対処行動に対する自己効力感, 感染の生起確率認知が 対処行動意思(抗体検査受検意思, 不特定関係抑制意思, コンドーム使用意思)と**正の関連**

○高本・深田(2008): 大学生197名(男79名 女118名)質問紙調査

木村(1996)の研究計画に, エイズ教育の経験と疾患に対する知識量を含め, 追試的調査を行ったところ, 疾患に対する知識量と対処行動意思との**関連が見いだされた**。

先行研究(1)からの示唆

これらの先行研究では、観察学習やパーソナリティ変数、類似した脅威の先行経験などを想定している。

しかし、人間が何らかの行動を選択する際には、**選択後の自己の生活ぶりや自己の姿を思い描き**、その行動により自己が周囲の環境からどのような影響を受ける予想し検討する中から、**より適切と判断されるような行動を選択**していかうとすることは十分に想定に出来る。

c.f. 就業自己イメージ(清水・下斗米・風間,2003/2005)

先行研究(2)

○エイズ相談を抑制する要因(1): “知覚スティグマ”

HIV感染に伴う、強い死や偏見の知覚が対処行動に与える負の影響は、各文化圏で共通して指摘されてきた。

(Visser *et al.*, 2006; Babalola, 2007; Lee *et al.*, 2006; Zelaya *et al.*, 2008)

⇒ **本邦独自の文脈から検討する必要性**

○エイズ相談を抑制する要因(2): Help-seeking研究の視点から

Help-Seeking(援助要請)研究において、援助を求めた後に自己が周囲からどのような影響を受けるか、という予測が、人の援助要請行動に影響することは従来から指摘されてきた。

c.f. “援助不安(水野・石隈, 2001; 飯田, 2004; 水野・木村, 2005)”

“自己スティグマ(Komiya., Good & Shrood, 2000 ; 山本・飯田・井上, 2009)”

概念定義

HIV感染想定時の自己イメージ

「HIV感染想定時に、自己が置かれる状況や周囲からの受ける影響に関する見通し」（飯田・伊藤・井上, 2009., 投稿中）

→ **以下の手続きを経て、原版の尺度(β版)を作成**

Phase1: 項目収集。大学生263名(男99名、女164名)の自由記述文

Phase2: 尺度項目作成。

1) 大学院生 4名により自由記述文を分類し尺度項目を作成(52項目)

2) 専門家4名により、定義との対応関係、回答のしやすさ等を検討

Phase3: 予備調査。大学生112名(男27名、女85名)での質問紙調査

項目分析の結果から52項目から30項目。4因子。

目的

HIVSIS(β版)の因子構造と信頼性を検証するとともに、予防的介入プログラムの計画・実施、および効果の測定・評価の際に実用的なツールのために、

研究1で示された因子構造を損なわない形で項目数を減らして簡便化し、HIVSISを尺度として確立させる。

方法

調査時期:

2009年6月～7月

調査対象:

首都圏内6校の公・私立大学に通学する**大学生1234名**

私立A大学:229名、私立B大学420名、私立C大学219名

私立D大学219名、私立E大学163名、私立F大学95名、公立G大学108名

調査方法:

質問紙法。講義後の時間を利用して配布し、1週間後に回収。

回収は476部(回収率35%)。

分析対象:**435名(男130名、女284名、不明21名)**。

有効回答率91.3%、平均年齢は19.23歳(標準偏差1.44)

調査内容及び解析計画

調査内容:

- ①性別、年齢
- ②暫定版HIV自己イメージ尺度(HIV Self Image Scale β版)
30項目、4因子。

教示:「もしあなたがヒト免疫不全ウイルス(HIV)に感染したとしたら、どのような状況になると思いますか。各項目について、あなたの意見にあてはまるものを1つだけ選んで○をつけてください」

評定:7件法(“非常にそう思う”、“かなりそう思う”、“どちらかといえばそう
思
う”、“どちらともいえない”、“どちらかといえばそう思わない”、“ほと
ん
どそう思わない”、“全くそう思わない”)

解析計画:

- ①因子構造の検討:項目分析、因子分析(探索的因子分析、確認的因子分析)
- ②下位因子の性差の検討:性差を独立変数とした t検定

倫理的配慮

調査前：

質問紙配布前に、①ヒト免疫不全ウィルス、および後天性免疫不全症候群に関わる調査であること、②回答は任意であり、拒否しても不利益にならないこと、③個人を特定せず研究以外の目的には使用しないこと、④配布された質問紙は添付の封筒に封緘し留置での回収であることを口頭と文章で明示

調査後：

1週間後の質問紙回収時、エイズ相談を受けられる近隣の機関の案内文と知識普及啓発を目的とした冊子を配布。

因子構造の検討

Table 1 HIV感染想定時の自己イメージ尺度の因子分析結果^{1), 2), 3)}

項目名	I	II	III	IV	V ²	Av. (SD)
I 社会からの隔絶 ($\alpha = .81$)						
ひきこもる	.87	.03	-.03	-.12	.68	3.89(1.74)
大学から遠のく	.75	-.09	.05	-.05	.47	3.85(1.73)
まわりの人の目が気になる	.58	.02	.07	.10	.41	5.32(1.60)
まわりの人と距離を置いて付き合う	.55	.03	-.04	.03	.35	4.63(1.48)
まわりの人と気まずくなる	.54	.12	-.05	.20	.53	4.86(1.50)
II 身体的な脆弱さ ($\alpha = .78$)						
病気にかかりやすくなる	-.15	.88	-.06	-.01	.69	4.90(1.54)
病気が治りにくくなる	-.08	.63	-.01	.20	.48	4.92(1.43)
身体に痛みが走る	.15	.64	-.02	-.08	.47	4.14(1.48)
熱が出る	.21	.54	.12	-.11	.38	4.21(1.44)

Ⅲ 生活態度の変容 ($\alpha = .83$)

出来るだけ楽しい生活を送ろうとする	-.10	.07	.88	-.01	.83	5.46(1.41)
出来るだけ自分がしたいことをする	.07	-.02	.79	.00	.60	5.38(1.33)
悔いの残らないような生活を送ろうとする	.04	-.05	.72	.06	.51	5.50(1.47)

Ⅳ 親密な対人関係の喪失 ($\alpha = .76$)

結婚が出来なくなる	.04	-.04	-.01	.84	.72	4.74(1.71)
恋人が出来なくなる	.09	-.03	-.02	.75	.62	4.82(1.66)
性行為が出来なくなる	.10	.05	.08	.57	.29	5.69(1.42)

固有値 3.91 1.98 1.17 .96

寄与率 26.08 13.20 7.78 6.40

累積寄与率 26.08 39.28 47.06 53.46

Note: 1) 主因子法 (プロマックス回転後), 2) $N = 435$ (男130名, 女284名, 不明21名), 3) 尺度全体の信頼性係数は, $\alpha = .79$

AGFI = .88 (GFI = .92) RMSEA = .08

性差の検討

HIVSISの4下位因子の得点の性差について検証した。

→ <生活態度変容> ($t(412) = -2.76, p < .01$)

女性 > 男性

男性に比べて女性の方が、HIV感染想定時に、生きることに前向きにとらえようとする傾向が強かった。その他の下位因子においては有意な差は認められなかった。

考察と今後の課題

本調査を通じて、HIVSISの因子構造が明らかとなり、尺度としての信頼性が、一定程度確保された。

ただし、尺度の妥当性については、因子的妥当性、内容的妥当性にはついては検討したものの、その他の妥当性の検証は行っていない(c.f. 構成概念妥当性、予測的妥当性)。

これらの検討を経た後、今後のHIV/AIDSの予防的介入プログラムにとっての数少ない評価ツールの一つとして、HIVSISは有効となる可能性がある。

尺度の有用性・可能性について

①プログラムの計画：

人間の行動変容を促す上でどこに焦点を当てると、より効果的になるか、と計画するために、地域性に応じた介入プログラムの作成するためのツール(ニーズサーベイ)

②プログラムの評価

介入前と介入後の変化を追い、標的である行動変容をプログラムがどの程度促したかを検討するためのツール

Ex. 仮に、本尺度がエイズ相談の利用を30%程度 説明出来たとします。介入の際、その30%に働きかけることが、結果的にエイズ相談を促すことに繋がります(アウトカム指標)。

③評価→計画

介入は一回で終わるというわけではないので、評価を受けて次の段階では何に焦点を当てるかを検討する際に用いるツール

主要引用・参考文献

- Babaloa, S. 2007 Readiness for HIV testing among young people in Northern Nigeria: The roles of social norm and perceived stigma. *AIDS Behavior*, **11**, 759-768.
- 飯田敏晴・伊藤武彦・井上孝代 2009 想像されたヒト免疫不全ウイルス感染後の自己イメージ尺度の作成. 日本応用心理学会第76回大会発表論文集, 57.
- 飯田敏晴・いとうたけひこ・井上孝代 2010 日本の大学生におけるHIV感染経路に関する知識と偏見との関連: 性差に焦点をあてて. 応用心理学研究, **35**, 81-89.
- Kalichman, S.C., & Simbayi, L.C. 2003 HIV testing attitude, AIDS stigma, and voluntary HIV counseling and testing in a black township in Capetown, South Africa. *Sexually Transmitted Infections*, **79**, 442-447.
- 木村堅一 1996 防衛動機理論に基づくAIDS予防行動意思の規定因の検討. 社会心理学研究, **12**, 86-96.
- 清水裕・下斗米淳・風間文明 2003 大学生の就業自己イメージ尺度作成の試み. 社会心理学研究, **20**, 191-200.
- 高本雪子・深田博己 2008 HIV対処行動意思とHIV感染者・AIDS患者への態度に及ぼすAIDS情報の効果. 対人社会心理学研究, **8**, 23-33.

補足1 妥当性の検討

Table 2 HIV感染想定時の自己イメージ尺度における下位因子と基準変数との関連

下位因子名	項目数	尺度得点		知覚スティグマ		ソーシャルサポート	HIV感染/AIDSに関する知識	自己効力感
		平均値	標準偏差	非難・判断	社会的距離			
社会からの隔絶	5	4.45	1.08	.25*	.53***	-.25*	-.04	-.14
身体的脆弱さ	4	4.79	1.28	.24*	.19*	-.03	.20*	-.15 [†]
生活態度の変容	3	5.80	1.03	-.06	.13	.26**	.13	.28**
親密な対人関係の喪失	3	5.56	1.24	.18	.34**	-.09	.14	-.08

Note) [†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ N = 84(男28名, 女56名)

ご清聴ありがとうございました。

連絡先 : tiida@acc.ncgm.go.jp